

『皇極經世書』 声音図の音価と『韻略易通』の音韻体系について

『長田夏樹論述集（下）』第28章

（原載：『神戸外大論叢』第30巻3号，1979年8月）

宋代は『広韻』『集韻』『礼部韻略』系の守旧的韻書が通行していて同時代音を反映する資料が少ないため、中国語音韻史において実態が掴みにくい時代の一つである。この論文は「『鷄林類事』の朝鮮語を表わす漢字音の体系と関連して」という副題があり、孫穆により北宋の崇寧年間（1102～06）初に編まれた同書は当時の朝鮮語の248条の単語を漢字で表記しており、朝鮮語史研究上貴重な資料となっているが、それと同時代の邵雍（1011～77）の『皇極經世書』声音図の反映する音価を検討し、合わせて明の正統7（1442）年の蘭茂『韻略易通』の推定音価も記している。

第1節ではまず『皇極經世書』声音図の概要を紹介し、韻母を表示した「正声図」と声母を表示した「正音図」を簡略に表示している（李栄『切韻音系』「附録三」のものと同じ）。

第2節ではついで先行する周祖謨・陸志韋・李栄の研究を承けて推定音価を記す。そこで『皇極經世書』が朝鮮の音韻学に大きな影響を与えたことに触れて、『東国正韻』（1447）や徐敬徳（1489～1546）の『皇極經世数解』を挙げ、かつ崔錫鼎（1646～1715）の『經世正韻』・黄胤錫（1729～1791）の『理藪新編』の韻母のハングル注音を引くのは注目される。

第3節では『鷄林類事』の概要を紹介し、前間恭作『鷄林類事麗言攷』ほか韓国の学者の研究を引用している。ここで、「馬」merと「斗」marの違いが一等字「末」と二等字「抹」とで書き分けられ、また朝鮮語のアクセントの違いに応じて声調の違う字が与えられていることに言及している（Ramsey, S. *Accent and Morphology in Korean Dialects*, Seoul: Tower Press, pp.7-12, 1978 ではより系統的な検討がなされている）。

第4節では『鷄林類事』の音韻特徴として主として入声の反映を検討する。喉内入声の音訳漢字で表される語の中世朝鮮語の音形ではほとんど -k が見られないとし、舌内入声については中世朝鮮語の -r の語が最も多く、-s, -t に終わる音節の他、ゼロ韻尾もある、とする。唇内入声はすべて -p に対応する。そこで、「喉・舌内入声の音が似た音であり、唇内入声だけが古い入声音を保っているのは先に見た經世書声音図の特徴と同じである。」と結論づける。「栗曰監〔鋪檻切〕 pam」と「虎曰監〔蒲南切〕 pem」につき、「語頭子音が[φ-]のような音であったことを物語っていよう。」とする。ただし、中古音ではもともと咸深摂の唇音声母字は少なく、凡韻系以外はほとんど僻字で、朝鮮語の pam, pem を写すのに適当な字がなかったため反切を使っている可能性がある。

第5節では『韻略易通』の推定音価の結論が表示されている。

（遠藤光暁）